

難船小僧

夢野久作

青空文庫

船長おやじの横顔をジッと見てみると、だんだん人間らしい感じがなくなってきた。骸骨しぶがみを渋紙しぶがみで貼り固めてワニスで塗上げたような黒いガツチリした凸額おでこの下に、硝子球ガラスだまじみたギョロギョロする眼玉が二つコビリ付いている。マドロス煙管パイプをギユウと引唧ひっくわえた横一文字の口が、旧式軍艦の衝角しょうかくみたいな巨大な顎あごと一いつしよ所に、鋼鉄の噛締機バイトそっくりの頑固な根性を露出むきだしている。それが船橋ブリッジの欄干クロスに両肱ひじを凭もたせて、青い青い秋空の下に横たわる陸地おかの方を凝視みつめているのだ。

そのギロリと固定した視線の一直線上に、巨大な百貨店らしい建物の赤い旗がフラフラ動いている。その周囲に上シャンハイ海の市街まちが展開している上をフウワリと白い雲が並んで行く。

……といったような無事平穏な朝だったかね。昭和二年頃の十月の末だったつけが……。足音高く船橋ブリッジに登って行った俺は、その船長おやじの背後うしろでワザと足音高く立停たちどまった。

「おはよう……」

と声をかけたが渋紙面しぶがみづらは見向きもしない。何しろ船長仲間でも指折ゆびおりの変人だからね。何か一心に考えていたらしい。

俺は右手に提げた黄色い、四角い紙包かみづつみを船長の鼻の先にブラ下げてキリキリと回転させた。

「御註文の西蔵紅茶です。ヤツと探し出したんです」

船長はやつと吃驚びっくりしたらしく首を縮めた。無言のまま六尺豊しやくかの長身をニューとこつ

ちへ向けて紅茶を受取った。

「ウウ……機関長おやかたか……アリガト……」

とプツスリ云った。コンナ時にニンガリともしないのがこの渋紙船長の特徴なんだ。取と付きの悪い事なら日本一だろう。こんな男には何でも構わない。殴られたらなぐり返す覚悟でポンポン云ってしまつた方が、早わかりするものだ。

「……昨夜、陸上おかで妙な話を聞いて来たんですがね。今度お雇いになつたあの伊那いな一郎つて小僧ですね。あの小僧は有名な難船小僧つていう曰くいわ付きの代物しろものだって、皆みんな云つてますぜ」

俺はそう云いさしてチョックラ船長おやじの顔色を窺うかがつてみたが、何の反応も無い。相も変らず茶色の謎語像スフィンクスみたいにプツスリしている。無愛相ぶあいそうの標本だ。

「あの小僧が乗組んだ船はキット沈むんだそうです。I・I・N・Aアイイナつて聞くと毛唐けとうの高級船

員なんか慄え上るんだそうです。乗ったら最後どんな船でも沈めるってんでね。……だから今度はこのアラスカ丸が危えってんで、大変な評判ですがね。陸上の方では……」

これだけ云つても船長の渋紙面は依然として渋紙面である。ネービー・カットの煙をプウと吹いた切り、軍艦みたいな顎を固定してしまった。しかし黒い硝子球は依然として俺の眼と鼻の間をギョロリと凝視している。モット俺の話を聞きたがっているらしいんだ。「あの小僧は小ちやくて容姿が美しいので毛唐の変態好色連中が非常に好くんだそうです。

あの小僧も亦、毛唐の高級に抱かれるとステキに金が儲かるんで、船にばかり乗りがるんだそうですが、不思議な事にあの小僧が乗った船で、沈まない船は一艘も無いんだそうです。初めてあの小僧を欧州航路に雇傭した郵船のバイカル丸が、ジブラルタルで独逸のU何号かに魚雷を喰わされた話は誰でも知っているでしょう。そんな時に漂流端舟に這いつてハンカチを振ったのが彼小僧のSOSの振出しだそうですがね。……それから第二丹洋丸がスコタラ沖でエムデンにアッパーカットを喰わされた時も、あの小僧は丁度、新式救命機の着込み方のモデルにされていたところだったそうで、そのまんま飛込んで助かつちまったんだそうです。……まあ運の良い奴といえはいえませんが、彼小僧の運が良いたんびに船全体の運命がメチャメチャになるんだから敵いません。……まだ他

にも二三艘、大きな船を沈めているんですが、そんなに大きな船でなくとも、チョット乗った木葉船こつばふねでも間違ひなく沈めるってんで、逆も凄すごがられています。早い話が房州通がよいの白鷺丸しらさぎにチョイと乗組んだと思うと、直ぐに横須賀の水雷艇と衝突させる。毛唐けとうの重役の随伴おともをしてブライトスター石油社オイルの超速自働艇モーター艇に乗ると羽田沖で筋斗とんぼ返りを打たせるといった調子で、どこへ行つても泣きの涙の三りんぼう扱いにされているうちに、運よく神戸でエムプレス・チャイナ号のAクラス・ボーイに紛れ込んで知らん顔をして上海まで来た。そいつを、どこかで伊那の顔を見識みしつていた毛唐の一等船客が発見して、あの小僧ボーイと一所なら船を降りると云つて騒さわぎ出した。そこで今度は事務長が面喰めんくらつて、早速小僧を逐出おいだしにかかったが、小僧がなかなか降りようとしない。食堂の柱へ噛かり付いて泣き叫ぶ奴を、下級船員が寄つてたかつて、拳銃ピストルや鉄棒パイプを突付けてヘトヘトになるまで小突きまわして、泥棒猫でも逐おい出すようにして棧橋へたたき出してしまった。そこで小僧はエムプレス・チャイナユニフォームの給仕服のまま生命辛いのち々からの手提籠バスケットひとつを抱えて税関の石垣の上でワイワイ泣いているのを、チャイナ号の向い合わせに繋留かかつていたアラスカ丸の船長……貴下あなたが発見みつて拾い上げた……チャイナ号へ面当つらあてみみたいに小僧の頭を撫なでて、慰め慰め拾い上げて行つた……という話なんです。現在、陸上おかでは酒場のみやでも税関でも海員ふね

の奴等やつらが寄ると触さわるとその噂うわさばかりで持切もちきつてますぜ。アラスカ丸の船長おやじはそんな曰いわく因縁、故事来歴附の小僧だつて事を、知つて拾つたんだか……どうだかつてんでね。非道ひどい奴はアラスカ丸が日本に着くまでに沈むか、沈まないかつて賭かけをしている奴なんか居るんですぜ」

俺は元来デリケートに出来た人間じゃない。君等きみらみたいな高等常識を持った記者諸君に「海上の迷信」なんて鹿しか爪つめらしい、学者振つた話なんか出来る柄じゃ、むろんないんだ。尤も若いうちは不良の文学青年でバイロンの「海の詩」なんかを女学生に暗あん誦しやうして聞かせたりなんかして得意になつていたもんだがね。しかしそれから後のち、永年荒つぽい海上生活を続けて来たお蔭で性根しやうねが丸で變つてしまった。身体からだこそこんなに貧弱な野郎だが、兇状きやうじやう持揃もちぞろいの機関室でも、相当押え付けるだけの腕うでツ節ぶしと度胸だけは口幅くちはばつたいが持つてゐるつもりだ。現に船員連中から地獄の親方と呼ばれてゐる位だ。……けども、その俺が、この汽紙船長おやじの前に出ると、出るたんびに妙に顔負けしてしまう。いつもこうしてペラペラと安やすつぽく喋舌しゃべらせられるから妙なんだ。しかも忠告する気で云つてゐる話おびただが、ツイお伽話ときばなしか何ぞのようにフワフワと浮付うわついてしまう。圧おしの利かない事夥おびただしい。「何も御幣ごへいを担かぐんじやありませんがね。そんな簞棒べらぼうな話が在あるかつて反対もしてみた

んですがね。今まであの小僧が乗った船が一艘残らず沈んだのが事実だったら、今度沈むのも事実には違いない。乗組員全体の生命にも拘わる話だ。何もあの小僧が居なけあ船が出ねえって理窟もあるめえし……お前んとこの船長がいくら変者だってそんな無鉄砲な酔狂をして乗組員を腐らせるような馬鹿でもあんめえ。あの小僧の曰く因縁、故事来歴を知らねえから平気で雇ったに違ねえんだ。悪い事あ云わねえから早く船長に話して、あの小僧を降してもらいな。多人数の云う事あ聴いとくもんだ。あとで必定後悔するもんだから……てな事を皆して色々云うもんですからね……ハハハ……」

船長の表情は依然として動かない。渋紙色の仮面が、頭の上の青空に凍り付いたように動かない。無表情もここまで来ると少々精神異状者じみて来る。俺は思い切りブツカルように云った。

「今の中に降しちやったらどうです」

船長の左の眼の下にピクピクと皺が寄った。同時に片目を半分ほど細くして、唇の片隅を上の方へ歪めた。これがこの船長の笑い顔なんだが、知らない人間が見たらとても笑い顔とは思えない。単なる渋紙の痙攣としか見えないだろう。

「郵船名物のS・O・S・BOYだろう」

と船長がしゃが嘎れた声でプツスリと云った。同時に眉まゆの間と頬ほっペタの頸筋くびすじ近くに、新しい皺が二三本ギューと寄った。冷笑しているのだ。

「エヘッ、知ってるんですか。貴方あなたも……」

「ムフムフ……」

と船長が笑いかけて煙草たばこに噓むせた。船橋ブリッジから高らかに唾液つばを吐いた。

「ムフムフ、知らんじやったがね。皆みんな、そう云うとる」

「皆みんなって誰がですか。どんな連中が……」

「船中ふねじゅうで云うとるらしい。水夫の兼かねの野郎が代表で談判に来た。ツイ今じやった」

「ヘエエ……何と云って」

「下おろさなければあの小僧をたたき殺すが宜ええかチウてな。胸の処なまくびの生首いれずみの刺青をまくつて見せよつた。ムフムフ」

「ヘエ。それで……下さないんですか」

船長が片目を静かに閉じたり開いたりした。それからネービー・カットの煙けむを私の顔の真正面ましようめんに吹き付けた。

「……迷信だよ……」

「それあそうでしょうけどね。迷信は迷信でしょうけどね」

「ムフムフ。ナンセン小僧をノンセンス小僧に切り変えるんだ。迷信が勝つか。俺達の動かす器械が勝つかだ」

「つまり一種の実験ですね」

「……ムフムフ。ノンセンスの実験だよ」

「……………」

二人の間に鉄壁のような沈黙が続いた。船長は平気でコバルト色の煙をプカプカやり出した。俺は、どうしたらこの船長を説き伏せる事が出来るかと考え続けた。

「君はいつからこの船に乗ったっけなあ」

と船長が突然に妙な事を云い出した。

「一昨年の今頃でしたっけなあ」

「乗る時に機械は検査したろうなあ」

「しましたよ。推進機スクリュウの切端きっぱしまで鉄槌ハマでぶん殴ってみましたよ。それがどうかしたんですか」

「ムフムフ。その時に機械の間に、迷信とか、超科学の力とか、幽霊とか、妖怪ばけもんとか、

理外の理とかいうものが挟まったり、引つかかったりしているのを発見したかね。君が検査した時に……」

「それあ……そんな事はありません。この船の機械は全部近代科学の理論一点張りで出来て動いているんですがね」

「現在いまでもそうかね」

「……………」

「そんなら……宜ええじやろ。中学生にでもわかる話じやろ。あのS・O・S小僧が颯たいふう風や、竜スバウト巻リーフや、暗礁コースをこの船の前途よびよに招寄せる魔力を持ちちよる事が、合理的に証明出来るチウならタツタ今でもあの小僧を降す」

「……………」

「元来、物理、化学で固まった地球の表面を、物理、化学で固めた船で走るんじやろ。それが信じられん奴は……君や僕が運用する数理計算が当てにならんナンテいう奴は、最初はなから船に乗らんが宜ええ」

俺はギューと参ってしまった。一言いちごんない……面目めんぼくない……と思って残念ながら頭を下さげた。

「ムフムフ。シツカリし給え。^{たま}オイオイ伊那一郎……S・O・S……ハハハ。ここだここだ……上^{あが}つち来い」

船長^{おやじ}を探すらしく巨大なバナナを抱えて船長室を駈^{かけだ}出して行く青服^{こども}の少年を船長^{おやじ}は手招きして呼び上げた。俺^{おれ}が買^かつて来た西^{チベツト}蔵紅茶の箱を、鼻の先に突^{つきつ}付けて命令した。

「これを船長室^{ケビン}へ持つて行^いて蒸留水で入れちくれい。地獄の親方と一所に飲^のむけにナ」

「CAPTAIN」と真鍮^{しんちゆうふだ}札^しを打^うつた扉^{ドア}を開くと強烈な酸類、アルカリ類、オゾン、アルコオルの異臭^{におい}がムラムラと顔を撲^うつ。その中に厚硝子^{あつガラスばり}張、桤^{オークざい}材の固定薬品棚、

書類、ビーカー、レトルト、精巧な金工器具、銅板、鉛板、各種の針金、酸水素瓦斯^{ガス}、電気鎔接機^{ようせつ}、天秤^{てんびん}、バロメータなんぞが齒医者か理髪店の片隅^{かど}みたいにゴチ

ヤゴチャと重なり合^あつて……というのがこのアラスカ丸の船長室なんだ。その片隅^{ようか}の八日巻の時計の下^{おれくぎ}の折釘^{メキシコ}に、墨西哥^{メキシコ}かケンタツキーの山奥あたりにしかないようなスバラしく長い、物凄^{ものすご}い銀色の拳銃^{ちよう}が二挺、十数発の実弾^{ほおば}を頬張^{ほおば}つたまま並んで引^ひつかかつているのだ。

話は脱線^{めつせん}するがこのアラスカ丸の船長はむろん独身^{ひとり}生活^{しんが}者で、女も酒も嫌いなんだ。上陸^{りく}なんか滅多^{めつた}にしないんだ。その代りに応用化学の本家本元の仏蘭西^{フランス}の大学で、理学博士

の学位を取っている一種の發明狂と来ているんだ。持っているパテントの数でも十や二十じゃ利かないだろう。みんなこの実験室でヒネリ出したっていうんだから豪勢なもんだろう。去年の冬だつてが、そんなパテントの権利も、巨万の財産も海員擁濟会ようさいかいに寄附して、胃癌いがんで死んじゃつたが、惜しい人間だったよ。……その時分……昭和二年頃には、小型な、軽い、無尽蔵に強力な乾蓄電池の製作に夢中になっていたつて。世界中の動力を蓄電池の一点張りにするてんで、誠に結構な話だが、その実験をするたんびに、船中の電動力を吸い集めて、電燈を薄暗くしちまつたりヒューズを飛ばしたりするのには降参させられたよ。おまけに舶来きぬまきせんの絹巻線が気に入らないと云つて、自分で器械を作つて絹巻線を製作しては切り棄すて、作つては切り棄てる事二万哩マイル。その仕事に行き詰まると、今のピストルを二挺持つて上甲板じょうかんばんに駈かけ上る。主檣メインマストに群がる軍艦鳥を両手でパンパンと狙ねらひ撃うちにして「アハハハハ」と高笑いしながら、落ちて来るのを見向きもしないでスタスタと実験室に引返すという変りようだからトテモ吾々われわれ凡俗には寄付よりつけない。恐ろしく小面倒な動力の計算書なんかを一週間がかりで書き上げて甲板デッキに持つて行くと、「アリガトウ」と云つて、見る片端かたはしから一枚一枚海の風に飛ばしてしまふ。……ナアニ、タツタ一目でみんな頭に入れちゃうんだ。ズツト後のちになつて船体検査なんかが来ると自分で機械の側へ立つ

て、何百という数字を暗記でペラペラ並べるんだから、計算した本人が舌を捲いちまう。

……そうかと思うと独逸の潜航艇やエムデンの出現時間と、場所をギツシリ書き入れた海図を睨んで「モウわかった。彼奴等の根拠地と、通信網と、速力がわかった」と云うとその海図をクシヤクシヤにして海へ飛ばす。それから毛唐の嫌う金曜日金曜日に汽笛を鳴らして、到る処の港々を震駭させながら出帆する、倫敦から一氣に新嘉坡まで、大手を振って帰って来る位の離れ業は平氣の平左なんだから、到底吾々のアタマでは計り知る事の出来ないアタマだよ。

そうした一種の鬼氣を含んだ船長の顔と、部屋の間でバナナを切っている伊那少年の横顔を見比べると、まるで北極と南洋ほど感じが違う。

毬栗の丸い恰好のいい頭が、若い比丘尼みたいに青々としている。皮膚の色は近頃流行のオリーブって奴だろう。眼の縁と頬がホンノリして唇が苺みたいだ。睫毛の濃い、張りのある二重瞼、青々と長い三日月眉、スツキリした白い鼻筋、紅い耳朶の背後から肩へ流れるキャベツ色の襟筋が、女のように色つぽいんだ。青地に金モールの給仕服が身体にピツタリと吸付いているが、振袖を着せたら、お化粧をしなくとも坊主頭のまま、生娘に見えるだろう。なるほど毛唐が抱いてみたがる筈だ……と思っ

トタンに、白いバナナの皿を捧げた小僧がクルリとこつち向きになって頭を一つ下げた。
俺の顔を、憐れみを乞うようにソツと見上げた。それから恋人に出会った少女みたいな桃
色の、悩ましげな微笑を一つニツコリとして見せたもんだ。

俺はゾツとしてしまったよ。……まったく……魔物らしい妖気が、小僧の背後の暗闇
から襲いかかって来たように思つたもんだよ。

俺は紅茶もバナナも良い加減にして故郷の地獄……機関室へ歸つて来た。今にも「オホ
ホホ」と笑い出しそうな人形じみた小僧の、変態的な愛嬌顔と向い合っているよりも、
機関室の連中の真黒な、猛獣面と睨み合っている方が、ドレ位気が楽だか知れないと思つ
て……。

ところが機関室に歸つてみると船員の伊那少年に対する憎しみが……否、恐怖が、予想
外に酷いのに驚いた。船長が是非ともあの小僧を乗組ませると云うんならこつちでも量見
がある……というので大変な鼻息だ。水夫連中は沖へ出次第に小僧を餌にして鰭を釣ると
云っているそうだし、機関室の連中は汽罐に突込んで石炭の足しにするんだと云つてフウ
フウ云っている。海員なんてものはコンナ事になると妙に調子付いて面白半分にドンナ無

茶でも遣りかねないから困るがね。現に水夫の中でも兄い分の「向う疵の兼」がわざわざ鉄梯子を降りて、俺に談判を捻じ込んで来た位だ。

「向う疵の兼」というのは恐ろしい出歯だから一名「出歯兼」ともいう。クリクリ坊主の額が脳天から二つに割れて、又喰付き合った創痕が、眉の間へグツと切れ込んでるんだ。そいつが出刃包丁を啣えた女の生首の刺青の上に、俺達の太股ぐらいある真黒な腕を組んで、俺の寝台にドツカリと腰を卸して出ッ歯をグツと剥き出したもんだ。

「チョットお邪魔アしますが親方ア。今、船長の処へ行つて来たんでがしよう。親方ア」
「ウン。行つて来たよ。それがどうしたい」

「すみませんが船長があの小僧の事を何と云つてたか聞かしておくんなさい。……わつしや親方が船長に何とか云つたらしいんで、水夫連中の代表になって、船長の云い草を聞かしてもらいに来たんですが」

「アハハハ。それあ御苦労だが、何とも云わなかったよ」

「お前さん何にも船長に云わなかったんけエ」

「ウン。ちよつと云うには云つたがね。何も返事をしなかったんだ。船長は……」

「へエー。何も返事をしねえ」

「ウン。いつもああなんだからな船長は……」

「あの小僧を大事でえじにしてくれとも何とも……親方に頼まなかったんけえ」

「馬鹿。頼まれたって引受けるもんか」

「エムプレス・チャイナへ面当てにした事でもねえんだな」

「むろんないよ。船長おやじはあの小僧を、皆みんなが寄って集たかって怖がるのが、気に入らないらしいんだ」

「よしッ。わかったッ。それで船長おやじの了りようけん簡かんがわかったッ」

「馬鹿な。何を云うんだ。船長おやじだつて何もお前達の氣持を踏み付けて、あの小僧を可愛がろうつてえ了簡かんじゃないよ。今にわかるよ」

「インニヤ。何も船長おやじを悪く云うんじやねえんですが。此船うちの船長おやじと来た日にや海の上の神様なんで、万に一つも間違いいがあるうたあ思わねえんですが、癩しやくさわに障るのはあの小僧でがす。……手前の不吉いな前科こつらも知らねえでノメノメとこの船へ押しかけて来やがったのが癩さわに触さわるんで……遠慮えんよしやがるのが当あたりまえ前まえだのに……ねえ……親方……」

「それあそうだ。自分の過去を考えたら、遠慮するのが常識的だが、しかし、そこは子供だからなあ。何も、お前達の顔を潰つぶす氣で乗った訳じやなからう」

「顔は潰れねえでも、船が潰れりや、おんなじ事でさあ」

「まあまあそう云うなよ。俺に任せとけ」

「折角だがお任せ出来ねえね。この向う疵きずは承知しても他の奴等やつらが承知出来ねえ。可かわい哀相そうと思うんなら早くあの小僧を卸おろしてやつておくんなさい。面つらを見ても胸糞むなくそが悪いから」

「アツハツハツ。恐ろしく担ぐじやねえか」

「担ぐんじやねえよ。親方。本気で云うんだ。この船がこの棧橋を離れたら、あの小僧の生命いのちがねえ事ばかりは間違まちがいねえんで……だから云うんだ」

「よしよし。俺が引受けた」

「へエ。どう引受けるんで……」

「お前達の顔も潰れず、船も潰れなかったら文句はあるめえ。つまりあの小僧の生命いのちを俺が預かるんだ。船長が飼かっているものを、お前達めえたちが勝手にタタキ殺すつてのは穏やかじやねえからナ。犬でも猫でも……」

「へエ。そんなもんですかね。へエ。成る程。親方がそこまで云うんなら私等あつしらあ手を引きましようが、しかし機関室こっちの兄貴達に、先に手を出されたら承知しませんよ。モトモト

あの小僧は甲板組の者ですからね」

「わかつてるよ。それ位の事あ」

「ありがとうゴンス。出娑婆つた口を利いて済みません。兄貴達も容赦して下せえ」

と会釈をして兼は甲板へ帰った。生命知らずの兇状持ばかりを拾い込んでいる機

関部へ来て、これだけの文句を並べ得る水夫は兼の外には居ない。現に機関部の連中は、

私の寢室の入口パイに立塞がつて、二人の談判に耳を傾けていたが……むろんデッキ

野郎の癖に、わざわざ親方の私の処へ押しかけて来る兼の利いた風な態度を憎んで、今に

も飛びかかりそうな眼付をしながら扉の蔭に犇いていたものであるが、兼が「兄貴達も容

赦してくれ」と云つて頭をグツと下げた会釈ぶりが気に入ったらしく、皆顔色を柔らげて

道を開けて通してやった。平生なら甲板から塵一本、機関室へ落し込んでも、只はおかな

い連中であるが……。

そんな訳で、風前の燈火みたような小僧の生命を乗せたアラスカ丸が、無事に上

海を出た。S・O・Sどころか時化一つ喰わずに門司を抜けて神戸に着いた。それから

船長一流の冒険だが六時間の航程を節約するために、鳴戸の瀬戸の渦巻を七千噸の巨体で一

氣に突切つて、御本尊のS・O・S・BOYを慄え^{ふる}上がらせながら平氣の平左で横浜に着いてしまつた。

横浜で印度^{インド}綿花と南洋材を全部上げてしまうと、今度は晚香坡^{バンクーバ}行の木綿類を吃水^{きつすい}一パイに積込む^{つみこ}。同時にアラスカ近海の難航海に堪え得るだけの食料や石炭^{すみ}を、船が割れる程突込む^{つっこ}訳だが、その作業は平生^{いつも}の通り二三日がかりで遣るのでさえ相当忙^{せわ}しいのに、向^む岸^{こうぎし}の晚香坡^{バンクーバ}から突然^{だしぬけ}に大至急^{うんぬん}云々の電報が来て、二十四時間以内の出帆^{しゅつぱん}という事になつたので、その忙がしさといつたら話にならない。おまけに横浜市内の道路工事の影響^{おかげ}とかで、臨時人夫^{エキストラ}が間に合わない^{エキストラ}と来たので、機関部の石炭^{すみ}運びなんかは、文字通りの地獄状態に陥つてしまつたものだ。

それも一口に地獄と云つただけじゃ局外者^{しろうと}にはわからないだろう。普通の客船^{メルボート}は別であるが、外国通いの氣の利いた荷物船^{カゴボート}になればなるほど、荷物をウンと詰め込まれる人間の通れる……荷役の出来る処^{すみぐら}ならばどこでも構わない。空隙^{すきま}のあらん限り押し込んでしまふので、石炭を積む処は炭庫^{すみぐら}以外に殆んど無いと云つていい。そこへ今度のアラスカまわりみたいな難航路になると必要以上の石炭を積んでおかないとドンナ海難にぶつかつて、どこへ流されるかわからないので、楕円形の船の胴体と、四角い部屋部屋が交錯し

て作っているあらゆる狭い、人間の通れないような歪み曲った空隙に石炭をギツシリと詰め込まなければならぬ。その作業の危険さと骨の折れる事といったら、それこそこの世の生き地獄と云つても形容が足りないだろう。この船の料理部屋の背後の空隙なんかへ行く連中は、ドン底の水槽の鉄蓋まで突き抜けた鉄骨の隙間に、一枚の板を渡して在る。左右の壁には火のような蒸気の鉄管が一面にぬたくっている、通り抜けただけでも呼吸が詰まって眼がまわる上に、手でも足でも触れたら最後大火傷だ。そこに濛々と渦巻く熱気と、石炭の粉の中に、臨時に吊した二百燭光の電球のカーボンだけが、赤い糸か何ぞのようにチラチラとしか見えていない。そこを二三度も石炭籠を担いで往復してから急に上甲板の冷めたい空気に触れると、眼がクラクラして、足がよろめいて、鬼のような荒くれ男が他愛なくブツ倒おれるんだ。ところがブツ倒おれたと見ると直ぐに、兄連が舷側に引ずり出して頭から潮水のホースを引っかけて、尻ペタを大きなスコップでバチンバチンとブン殴るんだから、息のある奴なら大抵驚いて立ち上る。

「見やがれ。コン畜生。死ばるんなら手際よくクタバレ」

といった調子である。残酷なようであるが、限られた人数で限られた時間に仕事をしなければ、機関長の沽券にかかわるんだから止むを得ない。所謂、近代文明って奴の裡面

には到る処にこうした恐ろしい地獄が転がっているんだ。勿論、俺自身が、その中からタキ上げて来たんだから部下に文句は云わさないがね……。

その俺が横浜栈橋のシヨボシヨボ雨の中に突立って、積込^{つみこ}む石炭を一々検査していると汗と炭粉で菜葉服^{なつばく}を真黒にした二等機関士^{セカンド}のチャプリン髭^{ひげ}が、喘ぎ喘ぎ^{あえ}駈け降りて来て「トテモ手が足りません。何とかして下さい」と云うんだ。

「馬鹿。そう右から左へ人が雇えるか」

と一喝^{いつかつ}すると「それでもデツキの方で誰か一人でもいいんですから」と泣きそうな顔をする。

「馬鹿ッ。デツキの方だって相当忙がしいんだ。殴られるぞ」

「……でも船長室のボーイが遊んでいます」

「あんな奴が何の役に立つんだ」

「……でも、みんなそう云っているんです。この際、紅茶のお盆なんか持ってブラブラしている奴はタタキ殺しちまえて……」

「君から船長にそう云い給え」

「ドウモ……そいつが苦手なんで」

「よし。俺が云ってやろう」

忙がしいのでイライラしていた俺は、二等運転手チャプリンの話が五月蠅うるさかったんだろう。そのま
ま一気にタラップを馳かけあが上あがって、船長室に飛込んだ。船長は相も変わらず渋紙色の無表情な
顔をして、湯気の立つ紅茶を啜すすっていた。傍の鉛張なまりばりの実験台の上で、問題の伊那少年
が銀のナイフでホットケーキを切っていた。

俺は菜葉服のポケットに両手を突込んだまま小僧の無邪気な、ういういしい横顔をジロ
リと見た。

「この小僧を借してくれませんか」

伊那少年の横顔からサツと血の気が失うせた。覺おびえたように眼を丸くして俺と船長の顔を
見比みくらべた。ホットケーキを切りかけた白い指が、ワナワナと震えた。……船長も内心愕然ぎよつ
としたらしい。飲みさしの紅茶を静かに下に置いた。すぐに云った。

「どうするんだ」

「石炭運びの手が足りないって云うんです。みんなブツブツ云っているらしいんです……
済みませんが……」

「臨時は雇えないのか」

「急には雇えません。二十四時間以内の積込みですからね。明日の間になら合うかも知れませんが……皆モウ……ヘトヘトなんで……」

船長の額に深い豎皺が這入った。コメカミがピクリピクリと動いた。当惑した時の緊張した表情だ。こうした場合の、そうした船員の気持が、わかり過ぎる位わかつているんだからね。

それから船長は白いハンカチで唇のまわりを丁寧に拭いた。ソロソロと立ち上って伊那少年を見下した。伊那少年も唇を真白にして、涙ぐんだ瞳を一パイに見開いて船長の顔を見上げたもんだ。

その時の船長の云うに云われぬ悲痛な、同時に冷え切った鋼鉄のような表情ばかりは、今でも眼の底にコビリ付いているがね。

船長はコメカミをピクピクさせながら大きく二度ばかり眼をしばたいた。俺の顔をジツと見て念を押すように云った。

「大丈夫だろうな」

俺は無言のまま無造作にうなずいた。

俺と一所に静かに、二三度うなずいた船長は伊那少年を顧みて、硝子のような眼球を

ギリリと光らした。決然とした低い声で云った。

「……ヨシッ……行けッ……」

「ウワア——アッ……」

と伊那少年は悲鳴を揚げながら船長室を飛出したが……その形容の出来ない恐怖の叫び、悲痛の響^{ひびき}、絶体絶命の声が俺は、今でも思い出すたんびにゾツとする。伊那少年は石炭運びの恐ろしさを知っていたのだ。否^{いな}、ソレ以上の恐ろしい運命が、石炭運びの仕事の中に入れ交^{まじ}っているのを予感していたのだね。

しかし伊那少年は逃れ得なかった。船長室の外には、俺のアトから様子を見に来た向う疵の兼が立っていた。大手を拡げて伊那少年を抱きすくめてしまったもんだ。

「ギャア——。ウワアッ。助けて助けて……カンニンして下サアイ。僕はこの船を降りますから……どうぞどうぞ……助けてエ助けてエッ……」

「アハハハ。どうもしねえだよ。仕事を手伝いせえすれあ、ええんだ」

「許して……許して下さあい。僕……僕は……お母さんが……姉さんが家^{うち}に居るんですから……」

伊那少年は濡^ぬれたデツキに押え付けられたまま、手足をバタバタさして泣き叫んだ。

「ウハハハハ。何を吐かすんだ小僧。心配するなつて事……俺が引受けるんだ。この兼かねが受合うけあうたら、指一本指さしやしねえかな。……云う事を聴かねえとコレだぞ」

兼は横に在った露西亞製の大スコップを引寄せた。そうして手を合わせて拝んでいる少年を片手で宙に吊した。小雨の中で金モール服がキリキリと廻転した。

「致します致します。何でも致します。……すぐに……すぐに船から下して下さい。殺さないで下さい」

「知つてやがつたか。ワハハハハハハ」

兼は大口を開いて笑いながら私たちを見まわした。船長も二等運転手も、多分俺の顔も石のように剛こわばつていた。あんまり兼の笑い顔が恐ろしかったので……額の向むこう疵きずまでが左右に開いて笑つたように見えたので……。

「……サ柔順おとなしく働らけ。誰も手前の事なんか云つてゐる奴は居ねえんだからな。ハハハ」
小雨の中に肩をすぼめて艙口ハッチを降りて行く伊那少年の背後姿は、世にもイジラシイ憐れあわれなものであつた。

そうして俺達はソレツキリ伊那少年の姿を見なかったのだ。

犬吠埼いぬぼうさきから金華山きんかざん沖の燈台を離れると、北海名物の霧がグングン深くなつて行く。

汽笛^{やたら}を矢鱈^{おびただ}に吹くので汽罐^{きかん}の圧力計^{ゲージ}がナカナカ上らない。速力も半減で、能率の不経済な事夥^{おびただ}しい。

一等運転手と船長と、俺とが、食堂でウイスキー入りの紅茶を飲みながらコンナ話をした。

「今度は霧が早く来たようだね」

「すぐ近くに冰山がプカプカやっているんじゃないかね。霧が恐ろしく濃いようだが……」
「そういえば少し寒過ぎるようだ。コンナ時にはウイスキー紅茶に限るて……」

「紅茶で思い出したがアノS・O・Sの伊那一郎は船長が降^{おろ}したんですか」

船長は木像のように表情を剛^{こわ}ばらせた。無言のまま頭を軽く左右に振った。

「おかしいな。横浜以来姿が見えませんか」

「ムフムフ。何も云やせん。あの時、君に貸してやった切りだ」

「ジョジョ冗談じゃない。僕に責任なんか無いですよ。デツキの兼に渡した切り知りませんが、貴方も見ていたでしょう」

「殺^やったんじゃないかね……兼が」

と云ううちに一等運転手^{チーフメート}が自分でサツと青い顔になった。

「……まさか。本人も降りると云つてたんだから……無茶な事はしまいよ」

「しかし降りるなら降りるで挨拶ぐらいして行きそうなもんだがねえ」

「ムフムフ。まだ船の中に居るかも知れん……どこかに隠れて……」

と船長が云つて冷笑した。例の通り渋紙の片隅へ皺しわを寄せて……硝子球ガラスだまをギョロリと

光らして……。俺は何かしらゾツとした。そのまま紅茶をグツと飲んで立上った。

こうした俺たちの会話は、どこから洩れたか判然わからないが忽ち船の中へパツと拡がった。

「捜し出せ捜し出せ。見当り次第海にブチ込め。ロクな野郎じゃねえ」

と騒ぎまわる連中も居たが、そんな事ではいつでも先に立つ例の向う疵むこきずの兼ねかねが、この時

に限つて妙に落付いて、

「居るもんけえ。飲まず食わずでコンナ船の中へ居おれるもんじゃねえちたら。逃げたんだ

よ」

と皆みんなを制したのでソレツキリ探そうとする者もなかった。しかし、それでも伊那少年の

行方は妙に皆みんなの気にかかつてしまつたらしく、狭い廊下や、デッキの片隅を行く船員の眼

はともすると暗い処を覗のぞきまわつて行くようであつた。

船を包む霧は益々ますます深く暗くなつて来た。

モウ横浜を出てから十六日目だから、大圏コースで三千哩マイル近くは来ている。ソロソロ舵かじをE・S・Eに取らなければ……とか何とか船長と運転手が話し合っているが、俺はどうも、そんなに進んでいるような気がしなかった。しかもその割りに石炭の減りようが烈はげしいように思った。これは要するに俺の腹加減で永年の経験から来た微妙な感じに過ぎないのだが、それでも用心のために警笛を吹く度数を半分から三分の一に減らしてもらった。同時に一時間八哩ノットの経済速度エコノミカルスピードの半運転を、モウ一つ半分に落したものだから、七千噸トンの巨体が蟻ありの匍はうようにしか進まなかった。

「オイ。どこいらだろうな」

「そうさなあ。どこいらかなあ」

といったような会話がよく甲板の隅々で聞こえた。むろん片手を伸ばすと指の先がボーッと見える位ヒドイ霧だから話している奴の正体はわからない。

「汽笛ふえを鳴らすと矢鱈やたらにモノスゴイが、鳴らさないと又ヤタラに淋さびしいもんだなあ」

「アリユウシャン群島に近いだろうな」

「サア……わからねえ。太陽も星もねえんだかな。六分儀なんかまるで役に立たねえぞうだ」

「どこいらだろうな」

「……サア……どこいらだろうな」

コンナ会話が交換されているところへ、老人の主^{しゅちゆう}厨^{ちゆう}が飼^まっている斑^{まだら}のフオックスステリヤが、甲板に馳^かけ上^あつて来ると突然に船首の方を向いてピツタリと立^{たち}停^どまった。クフンクフンと空中を嗅^かぎ出した。同時にワンワンワンと火の附くように吠^ほえ初めた。

「オイ。陸^{おか}だ陸^{おか}だッ」

とアトから跟^ついて来た主厨の禿^{はげ}頭^{あたま}が叫^こぶ。成る程、波の形が変化して、眼の前にボーツと島の影が接近している。

「ウワッ……陸^{おか}だッ……大變だッ」

「後^{ゴスタン}退^{たい}……ゴスタン……陸^{おか}だ陸^{おか}だッ」

「大變だ大變だ。ぶつかるぞッ……」

ワアワアワアワアと蜂^{はち}の巣^つを突いたような騒^うぎの中に、船^{たち}は忽^{たち}ちゴースタンして七千噸^{トン}の惰^く力をヤット喰^く止^とめながら沖^はへ離れた。船首にグングンのしかかつて来る断^{だん}崖^{がい}絶壁^{けつ}の姿を間一髪の瀬戸際まで見せ付けられた連中^{ひたい}の額^{ひたい}には皆^{みな}生^{あせ}汗^{あせ}が滲^{にじ}んだ。

「あぶねえあぶねえ。冗談^{ふえ}じゃねえ。汽笛^{ふえ}を鳴^ならさねえもんだから反響^{はんきやう}がわからねえんだ。

だから陸おかに近いのが知れなかったんだ」

「機関長の奴やタラにスチームを惜しみやがるもんだからな……テキメンだ」

「今の島はどこだったろう」

「セント・ジョージやねえかな」

「……手前てめえ……行つたことあんのか」

「ウン。飛行機を拾いに行つた事がある」

「何だ何だセント・ジョージだつて……」

「ウン。間違えねえと思う。波打際なみうちぎわの恰好かっこうに見おぼえがあるんだ」

「箆棒べらぼうめえ。セント・ジョージたらアリユウシヤン群島の奥じやねえか」

「ウン。船が霧の中でアリユウシヤンを突つき抜けて白令海ベーリングへ這入はいつちやつたんだ」

「間抜けめえ。船長おやじがソナ半間はんまな処へ船を遣やるもんけえ」

「駄目だよ。船長おやじにはもうケチが附いてんだよ。S・O・S小僧たに崇たられてんだ」

「でも小僧はモウ居ねえつてんじやねえか」

「居るともよ。船長おやじがどこかに隠してやがるんだ。夜中に船長室を覗のぞいたらシツカリ抱き

合つて寝てたつていうぜ」

「ゲエツ。ホントウけえ」

「……真^ま実^{じつ}だよ……まだ驚く話があるんだ。主^カ厨^{カン}の話だがね、あのS・O・S小僧ってな女だつていうぜ。……おめえ川島^{よしこ}芳子^{よしこ}ツてえ女知らねえか」

「知らねえね。〇〇女優だろう」

「ウン……あんな女だつていうぜ。毛^け唐^{とう}の船長なんか、よくそんな女をボーイに仕立てて飼^{ねだ}つてるって話だぜ。寝^ね台^{だい}の下^{した}の箱^{はこ}に入れとくん^くだそう^だ。自^じ分^{ぶん}の喰^{くい}物^{もの}を領^わけてね」

「フウン。そういえば理窟^{ふなだまさま}がわかるような氣もする。女ならS・O・Sに違^{ちが}えねえ」

「だからよ。この船の船^{ふなだまさま}靈^{たま}様^{さま}ア、もうトツクの昔に腐^{くさ}つちやつてるんだ」

「ああ嫌^{いや}だ嫌^{いや}だ。俺^{おら}アゾオツとしちやつた」

「だからよ。船員^{みんな}は小僧^{みつけ}を見付^{みつけ}次第^{しだい}タタキ殺^{ころ}して船^{ふなだまさま}靈^{たま}様^{さま}を浄^{きよ}めるって云^いつてんだ。汽^か鐘^まへブチ込^こめやあ五分間で灰も残^{のこ}らねえってんだ」

「おやじの量^{りか}見^みが知^しれねえな」

「ナアニヨ。S・O・Sなんて迷^{まよ}信^{しん}だつて機^き関^{かん}長^{ちやう}に云^いつてんだそう^だ。俺^{おれ}の計^{けい}算^{さん}に、迷^{まよ}信^{しん}が這^は入^いつてると思^{おも}うか^かつて機^き関^{かん}長^{ちやう}に喰^くつてか^かつたんだそう^だ」

「機^き関^{かん}長^{ちやう}は何^{なに}と云^いつた」

「へエエツて引き退さがつて来たんだそうだ」

「ダラシがねえな。みんなと一所に船を降りちまうぞつて威おどかしやあいいのに」

「駄目だよ。ウチの船長おやじは会社の宝物ほうもつだからな。チツトぐれえの気紛きまぐれなら会社の方で
大目に見るにきまつている。船員のりくみだつて船長おやじが棧橋に立つて片手を揚げれや百や二百は集
まつて来るんだ」

「それあそうかも知れねえ」

「だからよ。晚香坡バンクワに着いてつからS・O・Sの女郎めろうをヒヨツコリ甲板デッキに立たせて、ド
ンナもんだい。無事に着いたじゃねえかつてんで、コチトラを初め、今まで怖がつていた
毛唐連中をギャフンと喰くらわせようつて心算つもりじゃねえかよ」

「フウン。タチがよくねえな。事によりけりだ。コチトラ生命いのちがけじゃねえか」

「まつたくだよ。船長おやじはソンナ事が好きなんだからな」

「機関長も船長おやじにはペコペコだからな」

「ウムウム。この塩梅あんばいじゃどこへ持つてかれるかわからねえ」

「まつたくだ。計算にケチが付かねえでも、アタマにケチが付けあ、仕事に狂いが来るの
あ、おんなじ事じゃねえかな」

「そうだともよ。スンデの事にタツタ今だつて、S・O・Sだつたじえねえか」

「ああ。いやだいやだ……ペツペツ……」

コンナ会話を主檣の蔭で聞いた俺は、何ともいえない腐った気持になって、霧の中を機関室へ降りて行つた。……これが迷信というものだからかどうか知らないが、自分の頭の中まで濃霧に鎖されたような氣になつて……。

それから三日ばかりした真夜中から、波濤の音が急に違つて来たので眼が醒めた。アラスカ沿岸を洗う暖流に乗り込んだのだ……と思つたのでホツとして万年寢床の中に起上つた。

同時に船橋から電話が来て、すぐに半運転を全運転に切りかえる。霧笛をやめる。探照燈を消す。機関室は生き上つたように陽氣になった。一等運転手の声が電話口に響いた。

「石炭はドウダイ」

「桑港まで請け合うよ。霧は晴れたんかい」

「まだだよ。海路は見通したが空一面に残つてるもんだから天測が出来ねえ」

「位置も方角もわからねえんだな」

「わからねえがモウ大丈夫だよ。サツキ女帝星座^{カシオペヤ}が、ちょうどそこいらと思う近処^{きんじよ}へウツスリ見えたからな。すぐに曇つたようだが、モウこつちのもんだよ」

「アハハハ。S・O・Sはどうしたい」

「どつかへフツ飛んじやつたい。船長^{おやじ}は晩香坡^{バンクーパー}から鮭^{さけ}と蟹^{かに}を積んで桑港^{シスコ}から布哇^{ハワイ}へ廻わつて帰るんだつてニコニコしてるぜ」

「安心したア。お休みい……」

「布哇^{ハワイ}でクリスマスだよオオ——だ……」

「勝手にしやがれエエ……エ……だ……」

「アハアハアハアハ……」

ところがこうした愉快的な会話が、霧が晴れると同時にグングン裏切られて行つたから不思議であつた。

夜が明けて、霧が晴れてから、久し振りに輝き出した太陽の下を見ると、船はたしかに計算より遅れている。しかも航路をズツと北に取り過ぎて、晩香坡^{バンクーパー}とは全然方角違いのアドミラルチー湾に深入りして雪を被^{かむ}つた聖エリアス^{セント}の岩山と、フェア・ウエザー山の間^{あき}にガツチリと船首を固定さしているのには呆^{あき}れ返つた。……船長と運転手の計算も、又

は俺の腹加減までもが、ガラリと外^{はず}れてしまっていたのだ。

そればかりではない。

船に乗ってアラスカ近海へ廻わった経験のある人間でなければ、あの近海の波の大きさと、恐ろしさはチョット見当が付きかねるだろう。こんな処でイクラ法螺^{ほら}を吹いても、あの波濤^{なみ}のスバラシサばかりは説明が出来ないと思うが、何もかも無い。これが波かと思う紺青^{こんじょういろ}色の大山脈が、海拔五千米^{メートル}突^{セント}の聖エリ阿斯山脈を打ち越す勢いで、青い青い澄み切った空の下を漕^はてしもなく重なり合いながら押し寄せて来る。アラスカ丸は七千噸^{トン}だから荷物船^{カーゴボート}では第一級の大型だったが、たとい七千噸が七万噸でもあの波に引つかかったら木^こつ葉^はも同然だ。

一つの波の絶頂に乗上げると、岩と氷河で固めた恐ろしい恰^{かつこう}好^{セント}の聖エリ阿斯が直ぐ鼻の先に浮き上る。文句なしに手が届きそうに見える。これは、空氣が徹底的に乾燥しているから、そんなに近くに見えるんだが、水蒸氣の多い日本から行くと特別にソンナ感じがするんだ。望遠鏡で覗^{のぞ}いてもチツトも霞^{かす}んで見えない。山腹を這^はう蟻^{あり}まで見えやしまいかと思うくらいハッキリと岩の角々が太陽に輝いている……と思う間に、その大山脈の絶頂から真逆^{まっさかおと}落しに七千噸の巨体が黒煙^{くろけむり}を棚引^{たなび}かせて迂^{すべ}り落ちる。スキーの感じとソツ

クリだね。高い高い波の横つ腹に引き残して来る推進器スクリュウの泡をジイツと振り返っている
と、七千噸の船体が千噸ぐらいにしか感じられなくなつて来る。

……と思ううちに、やがて谷底へ落ち付いた一刹那せつな、次の波の横つ腹に艦首トッブを突込んで
ドンイイインと七噸から十噸ぐらいの波に艦首トッブの甲板デッキをタタキ付けられる。グリーンと沈ん
で甲板をザアザアと洗われながら次の大山脈のドテツ腹へ潜り込む。何しろ船脚ふなあしが
ギツシリと重いのだから一度、大きな波やつにたたかれると容易に浮き上らない。船室ケビンという
船室ケビンの窓が、青い、水族館みたいな波の底の光線に鎖とぎされたまま、堅板パーテカルや、内竜骨
が、水圧でもつて……キイツ……キイツ……キシキシキシと鳴るのを聞いていると、
それだけの水圧を勘定に入れた、材ストレンクス・オブ・マテリアルス料強弱の公式一点張りで出来上つてい
る船体だとわかり切つていても決していい心持ちはしない。そのうちにヤット波の絶頂しおけむま
で登り詰めてホットしたと思う束の間に、又もスクリュウを一シキリ空転させて、潮
煙けむりを捲まきた立てながら、文字通り千仞せんじんの谷底へ真逆落しだ。これを一日のうちに何千回か
何万回か繰返すと、機関室の寢床ベッドにジツと寝転んでいても、ヘトヘトに疲れて来る。

「オイオイ。機関長か……」

船長室から電話がかかる。

「僕です。何か用ですか」

「ウン。もっとスピードが出せまいか」

「出せますが、何故ですか」

「船がチツトも進まんチウて一等運転手が訴えて来おるんだ」

「今十六節^{ノット}出ているんですがね。義勇艦隊のスピードですぜ」

「馬鹿。出せと云ったら出せ」

「ドレ位ですか」

「十八ばつか出しちくれい」

「最大限^{フル}ですネ」

「ウン。石炭^{すみ}は在るかな」

「まだ在ります。全速力^{フル}で四五日分……」

「……ヨシ……」

ガチャリと電話が切れたと思うと、やがて船腹^{ふなばら}を震撼^{しんかん}する波濤^{なみ}の轟音^{おと}が急に高まつて来た。タツタ二節^{ノット}の違いでも波が倍以上大きくなったような気がする。又実際、船体のコタエ方は倍以上違って来るので、石炭の消費量でもチツトやソツトの違いじゃない。

そのうちに高緯度の癖で、いつとなく日ばボンヤリと暮れて、地獄座のフットライト見たいなオーロラがダラダラと船尾スタインにブラ下った。その下の波の大山脈の重なりを、夜通しばかりで白泡しらあわを噛みながら昇ったり降ったり、シーソーを繰り返して翳る朝の薄明りになってみると、不思議な事に船体ふねは、昨日きのうの朝の通り聖エリ阿斯とフェア・ウエザーの中間に船首を固定さしている。昨日きのうから固定していたんだか、夜の間に逆戻りしたんだかわからない。

「どうしたんだ」

「シツカリしろ」

とか何とか運転手と文句を云い合っているうちに、昨日きのうの朝の通りの白い太陽がギラギラと出て来た。空気が乾燥しているから岸の形がハッキリしている。山腹はを這う蟻ありの影法師まで見えそうである。

流石さすがに沈着な船長もコレには少々驚いたらしい。船橋ブリッジの上のぼって、珍らしそうに白い太陽を凝視している。その横に一等運転手がカラも附けないまま寒そうに震えている。

「逆戻りしたんだな」

「イヤ。波に押し戻されているんです。十八節ノットの速スピード力がこの波じゃチットモ利かないん

です」

「そんな馬鹿な事が……」

「いや実際なんです。去年の波とはタチが違うらしいんです」

「おんなじ波じゃないか」

「イヤ。たしかに違います」

一等運転手と船長がコンナ下らない議論をしているところへ、俺は危険を冒して梯子を這い登って行つた。船長は、真向いの聖エリアスの岩山に負けない位のゴツゴツした表情で云つた。

「モウ……スピードは出ないな。機関長……」

「出ませんな。安全弁が夜通しブウブウいつていたんですから」

「……弱つたな……」

この船長が、コンナ弱音を吐いたのを俺はこの時に初めて聞いた。

「……妙ですねえ。今度ばかりは……変テコな事ばかりお眼にかかるじゃないですか」

「あの小僧を乗せたせいじゃないかな。チョットでも……」

と一等運転手がヨロケながらひとりごと
「独言のように云つた。蒼白い、剛わばった顔をして

……俺は強く咳せき払いばらいをした。

「エヘン。そうかも知れねえ。しかし最早もう船には居ねえ筈だからな」

船長は何も云わなかった。苦い苦い顔をしたまま十八倍の双眼鏡を聖エリアスセントに向けた。

三人はそのまま氣拙きまづい思いをして別れたが、それから第三日目の朝になっても、依然としてフェア・ウエザーとセント・エリアスが真正面に見えた時には、流石さすがの俺も、ジイーンと痺しびれ上るような不思議を、脳髓の中心に感じた。同時に何ともいえない神秘的な氣持になつて、胸がドキドキした事を告白する。自分の魂が、船体と一所に、どうにもならない不可思議な力にガツシリと掴つかまれているような氣がしたからだ。

石のように固こわばつた俺と、チーフメーチーフメートトと、船長の顔がモウ一度、船長室でブツカリ合つた。

「ここいらを北上する暖流の速力が變つたつていう報告はまだ聞きませんよ」

運転手が裁判の被告みたような口調で船長に云つた。船長が他所事よそごとのようにネービー・カットの煙を吹いた。

「ムフムフ。變つたにしたところが、一時間十八節ノットの船を押し流すような海流が、地球表

面上に発生し得る理由はないてや」

と飽くまでも科学者らしく嘯いた。俺もエンチャントレスに火を付けながら首肯いた。

「とにかく俺のせいじゃないよ。石炭はたしかに減っているんだからな」

チーフメート
一等運転手も眼を白くしてコックリと首肯いた。同時に一層青白くなりながら白い唇を

動かした。

「……何か……あの小僧の持物でも……船に……残っているんじゃないでしようか」

船長は片目をつむつて、唇を歪めて冷笑した。しかし一等運転手は真顔になって、真剣に腰を屈めながら、船長室内のそこ、ここを覗きまわり初めた。おしまいには船長と俺が腰をかけている寝台までも抱え上げて覗いたが、寝台の下には独逸や仏蘭西の科学雑誌が一パイに詰まっているキリであつた。ボーイのスリッパさえ発見出来なかつた。

とうとう船全体が、動かす事の出来ない迷信に囚われて、スツカリ震え上がらせられてしまった。乗組員の眼付は皆オドオドと震えていた。

……船が動かない……S・O・S小僧の祟りだ……。

晴れ渡つた青い青い空、澄み渡つた太陽。静かな、切れるような冷めたい風の中で、碧へ
玉のような大濤に揺られながらの海難……。

……行けども行けども涯^はてしのない海難……S・O・Sの無電を打つ理由もない海難……理由のわからない……前代未聞の海難……。

「サアサア。みんな文句云うところアねえ、在りつたけの石炭^{すみ}を悉^{みんな}皆、汽罐^{かま}にブチ込むんだ。それで足りなけあ船^{ダン}底^{フロ}の木綿^{ロール}の巻荷^はをブチ込むんだ。それでも足りなけあ俺から先に汽罐^{かま}の中へ匍^はい込むんだ。ハハハ。サアサア。みんな石炭^{すみ}運びだ石炭^{すみ}運びだ……」

事実石炭は最早^{もう}、残りがイクラも無かつたのだ。横^は浜^まで積^つ込^みんだ時の苦勞を逆に繰返し、飛んでもない遠方から掘り出すようにしいしい、機関室へ拾い集めるのであつたが、その作業を初めると間もなく、残炭^{のこり}を下検^{した}分に廻^まわつた二等機関士のチャプリン髭^{ひげ}が、俺の部屋へ転がり込んで来た。

「……タ……大變です。S・O・Sの死骸が見つかりました」

「ナニ。S・O・S……伊那の死骸が……」

「エエ。そうなんです……ああ驚いた。ちよつとその水を一パイ。ああたまらねえ」

「サア飲め。意気地無し。どこに在^うつたんだ」

「ああ驚いちゃつた。料理部屋の背面^{うしろ}なんです。あすこの石炭^{すみ}の山の上にエムプレス・チャイナの青い金モール服を着たまんま半腐りの骸骨になつて寝ていたんです。イガ栗頭の

恰好かつこうがあいつに違いありませんが」

「骸骨……？……」

「ええ。あそこは鉄管パイプがゴチャゴチャしていてステキに暑いもんですから腐りが早かったんでしょう。白い歯を一パイに剥むき出してね。蛆うじ一匹居なかつたんですが……随分臭かつたんですよ」

俺は黙もくつて鉄梯子てつばしごを昇のぼつて、中甲板ちゅうかんばんの水夫部屋に來た。入口に掴つかまって仁王立におうだちちになつたまま大声で怒鳴どなりつた。

「おい。兼公かねこう居るかア。出齒でつばの兼公……生首なまくびの兼公は居ねえかア……」

「おおおオ——……」

と隅ツコの暗い寢台かいこだな柵かきから、寢ねぼけたらしい声がした。

「誰だあ……」

「おれだあ……」

「おお。地獄の親方さんか。これあどうも……」

「済ちよつとまねえが一寸、顔を貸してくれい」

「ウワアア。とうとう見付かったかね」

「シツ……」

と眼顔で制しながら兼公を水夫食堂へ誘い込んだ。天井の綱にブラ下りながら兼に金口煙草を一本呉れた。兼はしきりに頭を搔いた。

「どうも横浜じゃ、警察が怖わーがしたからね。つい秘密にしちゃったんで……」

「石炭運びの途中で殺ったんか」

「凶星なんで……ヘエ。もつとも最初から殺る気じゃなかったんで、みんながあの小僧は

女だ女だつて云いましたからね。仕事にかからせる前にチョット調べて見る気ですここに引っぱり込んだんで……ヘエ……」

「馬鹿野郎……そんで女だったのか」

「それがわからねえんで……あすこへ捻じ伏せて洋服を引んめくりにかかったら恐ろしく暴れやがつてね」

「当 前 だあ……それからどうした」

「イキナリ飛び付きやがつて、ここん処をコレ……コンナに喰い切りやがつたんで……」
兼は菜葉服とメリヤスの襯衣をまくつて、左腕の力瘤の上の繻帶を出して見せ

た。

「まだ腫^はれてんで……ズキズキしてるんですがね……恐ろしいもんですね」

「間^{てめえはだか}抜けめえ。そんな時に手前裸体だったのか」

「エヘヘヘヘ」

「変な笑い方をしるねえ。それからどうした」

「わっしやカーツとなっちやつてね。コイツ奴^め、降りるといったって他の船へ乗れあ、又、災難^{わざ}をしやがるんだからここで片付けた方が早道だ。男だか女だか殺^{おと}してから検査^{しらべ}た方が

早道だと思つちやつたところへ、血だらけの口をしたS・O・Sの野郎が、私の横ツ面^{つら}へ喰い切った肉をパツと吹つかけて「悪魔」とか何とか悪態^てを吐きやがったんで……手前^{てめえ}の悪魔は棚へ上げやがってね。……おまけに後で船長^{おとつさん}に告訴^{いっ}けてやるから……とか何とか吐^ぬかしやがったんでイヨイヨ助けておけないと思つて、首ツ玉をギューツと……まったくな
んで……ヘエ……」

「非道^{ひど}い事をするなあ。それで女だったかい」

「……それがその……野郎なんで……」

「プツ。馬鹿だなあ。それからどうしたい」

「それつきりでき。……ウンザリしちゃって放つたらかして来ちやっただんす」

「何故海に投り込まねえ」

「それが誰にも見つからねえように放り込みたかつたんで……親方や機関室の兄貴達にも申し訳ねえし、おまけに上海で、あつしが談判に行つた時に船長が入歯をガチガチさして、こんな事を云つただんす。あの小僧をタタキ殺すのに文句はないが……」

「チョット待つてくれ。たたき殺すのに文句はないって云つただね」

「そうなんで……しかし死骸は勿論、髪の毛一本でも外へ持ち出したら只はおかないぞッ……てね。そう云つて船長に白眼み付けられた時にや、あつしやゾツとしましたぜ。あんな気味の悪い面ア初めてお眼にかかつたんで……へエ……まっただんす……」

「フーム。妙な事を云つたもんだな」

「そう云つたんで……何だかわからねえけども……万一見付かつて首になっちゃ詰まらねえ。事によるとあの二挺のパチンコで穴を明けられちや叶わねえと思つて、そのまんまにしといたんです。まっただんす」

「案外意気地がねえんだな……手前は……」

「まっただんす……それからっていうものあの死骸の事が気になって気になって今日は

運び出そうか、明日は片付けようかと思ううちに、だんだん船にケチが附いて来るでしよう……死骸は腐って手が付けられなくなつて来るし、わつしやもう少しで病氣になるところだつたんで……もう懲り懲りしました。どうぞ勘弁しておくんない。あやまつても追付くめえけんど……」

「ハハハ。そんな事アもうどうでもいいんだ。今日は文句はねえ。手前行つて大ビラであの死骸を片付けて来い。船長には俺が行つて話を付けてやる」

「ヘエツ。本当ですかい親方ア」

「同じ事を二度たあ云わねえ」

「……ありが……ありがとう御座んす。すぐに片付けます。……ああサツパリした」

「馬鹿野郎……片付けてからサツパリしろ」

兼はS・O・Sの金モールの骸骨を胴中から真二つにスコップでたたき截つて、大きなバケツ二杯に詰めて出て来た。甲板に出て生命綱に掴まり掴まり二つのバケツを海の上へ投げ出したが、その骨の一片が、波にぶつかつて、又、兼の足元へ跳ね返つて来た時、兼は真青になつてその骨を引摺むと危くツンノメリながら、

「南無阿弥仏……」

と遠くへ投げた。

それは兼の一生懸命の震え上った念仏らしかったが、とてもその恰好が滑稽だったので、見ていた俺はたった一人で腹を抱えさせられた。

アラスカ丸は、それから何の故障もなくスラスラと晩香坡へ着いた。

同じ波の上を、同じスピードで……馬鹿馬鹿しい話だが、まったくなんだ。ところで話はこれからなんだ。

船長の横顔は見れば見るほど人間らしい感じがなくなって来るんだ。

骸骨を浚紙で貼り固めてワニスで塗り上げたような黒光りする凸額の奥に、硝子玉じ

みたギラギラする眼球が二個コビリ付いている。それがマドロス煙管を横一文字にギュウ

と啣えたまま、船橋の欄干に両脇を凭たせて、青い青い空の下を凝視しているんだ。そ

の乾涸びた、固定した視線の一直線上に、雪で真白になった晩香坡の棧橋がある。その

向う一面に美しい燈火がズラリと並んでいようという……ところまで、やっと漕ぎ付け

たんだがね。文字通りに……。

その棧橋の上に群がっている人間は、五日ほど遅れて着いたアラスカ丸をどうしたのか

と気づかつて、待ちかねていた連中なんだ。

「S・O・Sの野郎……骸骨^{ほね}になつてまで祟^{たた}りやがったんだナ……」

船長^{おやじ}が突然^{だしぬけ}に振返つて俺の顔を見た。白い義歯^{いれば}を一ぱいに剥^むき出して物凄^{ものすご}く哄^{こうしよ}笑^うしたもんだ。

「アハハハハ。イヤ……面白い実験だったね。やつぱり理外の理つて奴は、あるもんかなあ……タハハハ。ガハハハハハ……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

※表題の「難船小僧」には、「S・O・S・BOY」とルビがふられています。

入力：柴田卓治

校正：kazuishi

2004年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

難船小僧

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>